

浄土宗のみおしえ

④

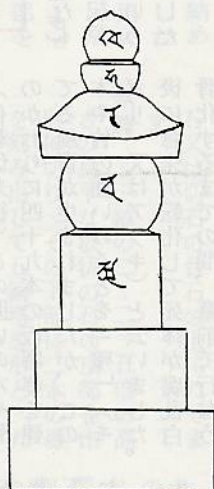
宗紋



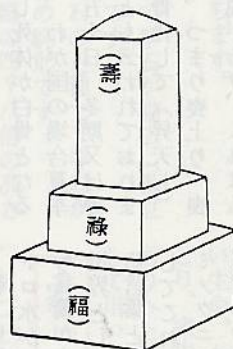
つぎのよう
月影杏葉紋



宝篋印塔



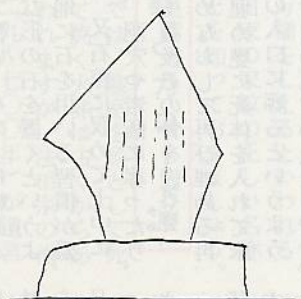
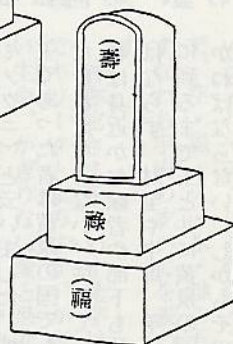
五輪塔



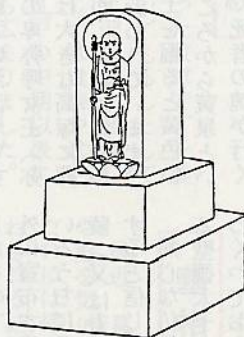
角碑



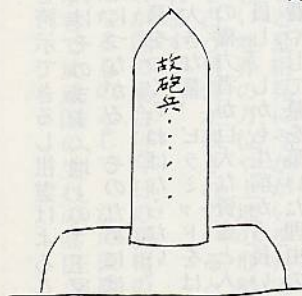
卵塔



自然石



水子, 童子を祀る



異形墓標

墓石は人なり
仏なり

墓

お墓の歴史

。塚……土を盛り、木を植えた葬所。
。墓……土を盛るかわりに建造物を建てた葬所。
。墳……丘のように盛土した大きな塚。
。墳墓・塋……墓と塚の総称。
。廟……靈魂のとどまるところ。

「塔」はインド的、仏教的なもので、「碑」は中国的、儒教的起源をもつもの、そして「墓」という日本語は墓地という場所をさしたものです。

「墓」は葬りの「は」と場所をあらわす「か」との合成語で葬所（死者を葬った場所）の意味ですが、ハフル（放る・投げる）力（場所）、つまり「棄て墓」のこととされています。

古代の人々は人が死ぬと、人里離れた山や谷（底）、林や森の中に遺棄し、あるいは木にくくりつけ、又は水に流し（水葬）て、後も見ずにいそいで帰ったといわれます。このような遺棄された死体がたまり、散乱しているところがハフリカ（墓場）です。人々は、このような場所に近づいたり、行

ったりすることをとてもしやがり恐れたのです。

又、古代の人々は、山を死霊が赴き、集まり住む聖地と信じていました。

死体を遺棄する習わしは少しずつ変っていき、やがて死体を野ざらしにしてそのまわりに木や竹で囲って聖域とし、かつ鳥獣の襲来を防ぐようになりました。後世、

（仏教伝来後）この囲いの木や竹のかわりに四十九本の板塔婆建てる風習が生まれましたが、この木や竹の囲いのことを「殯」（モガリ、又はアラキ）と云いました。後に意味が転化して死体が腐乱白骨化するまでの間、墓前行なう鎮魂の儀式をモガリと云うようになりしました。

この野ざらし死体が白骨となるまでの期間は、わが国の場合夏季又は暖地で約五十日、冬期又は寒冷地で約百日とも云われております。死者は白骨化して（昇天し）モガリが終る。つまり喪上り、喪

の終りとする説があり、これは私達が四十九日忌・百ヶ日忌のご回向をして喪の期間終了とする今の習慣と妙に一致しております。

この囲いは後に新屋になり御霊屋になりましたが、木や竹にかわって長持ちする石にかわっていき

ました。この配石が現在のお墓の原形であろうと云われております。

縄文・弥生時代になると一般の庶民は、風葬や土葬が主でしたが死体を土で覆い、その上に標識として種々な形の石を置くというように、墓地に石を用いる習慣が盛んになり、又石棺に収めて土中に埋めたり、洞穴や岩陰に葬ったり、風葬又は土葬後その骨を壺や甕、石棺につめなおして再び埋める再葬墓や、埋め甕に死体を入れて床下や家屋の入口に葬るというよう

なことが行なわれていたようです。「魏志倭人伝」の卑弥呼女王（弥生時代の後期）は大きな高塚に葬られていましたが、これは大陸から伝った風習と云われています。

昔、中国では土を掘ると黄色いドロ水が出るところから黄泉という言葉が生まれ、死者の魂が行く世界として地下（の国）を意味する言葉として用いられました。そしてこれをわが国では閻の国（ヨミノクニ）と云いました。地上で

王であつた者は黄泉の国でも王でなければならぬ。従つて王が死ねば身近かな縁者や部下も死ねばならず、財宝や牛馬、羊、奴隸に到るまで王と共に黄泉の国へ行かねばならない。しかもその数は多ければ多いほど王は黄泉の国で

力を誇示できるし祖霊はよろこぶ、それはそのまま（地上の）王家の繁栄につながる。そのためには大きな墓をつくらねばならない。世界一大きな墓、ピラミッドをはじめ昔の権力者が巨大な資金と人員を動員し、しかも生前から長い歳月を費やして墓を築いた理由の一つにこのような来世観があつたとされています。

わが国最大の墓、仁徳天皇の御陵（一五〇〇年前）も天皇が生存中に作り始め、巨費を投じて完成したものです。これは政治的に内外に宣布する目的の他に、生きているうちに墓をつくることは「寿陵（又は寿藏）」といつて長生きすると信じられていたからです。

熱心な仏教信仰者として知られる聖徳太子も質素なお墓を生前につくっておられます。このように生前に自分の墓を建てることは善根のつないだものとして大いに流行したといわれます。

このように時代が移るに従つて墓もさまざまな形や様式のものが見られました。墓碑と墓塔を兼ねた今日の石塔（角碑）が発達したのは江戸初期であり一般庶民の場合は土葬してその上に簡単な配石程度でした。そして江戸の中期以後になつて一般にも建墓

墓

と小山田)与清(一七八三〜一八四七)が墓相を講じ、門人たちが要点をまとめて一冊の本にした、「墓相小言」がわが国の墓相のはじまりといわれております。この頃から一般庶民も墓を建てるようになりましたが、この本の真意は、祖先を祭ることの大切さを説いています。そしてその具体化としてお墓を大切にせよということなのです。以後お墓は庶民の間に大いに広まり、それと共に自然に墓や墓石についての吉凶を云々するようになりしました。

墓相では、石塔の下台石を家祿(又は地・不動産)、上台石を福德(又は人・動産)、竿石を寿命(又は天・子孫)と見ます。そして墓石の大きさ・高さ・色あい・外柵(囲い)・土・墓石の配置等々の吉凶を占う他、墓石や墓全体の向きも、東・南・西・北、良(東北)・巽(東南)・坤(南西)・乾(西北)の八方位に照らして吉凶を判断します。

この他、お墓の場所も日当りが良く風通しもよい、水はけもよい、地盤がしっかりしている、少し高台がよい……等です。しかし、墓相についての約束ごとがあまりに多く、しかも墓相家によって吉凶判断がまちまちであることが少

なくないので。従ってこれらの墓相の項目に照らしていくと大部分のお墓は凶相かそれに近いものになり建て直さねばならなくなります。

巻尺と磁石のみで吉凶を占う墓相家から、過去の因縁調べをして後に建墓をすすめる墓相家までさまざまなですが、各墓相家に共通しているのは「陰徳を積む」ことが特に大切であると強調していることです。昔から「陰徳を積んでい」と災いを除く」といわれます。

占いは一つの統計学であって絶対的なものではなく、最後は個人本人の努力精進によって吉凶は変わるものです。

お墓は永久的な家の歴史的ですが、たを表わし礼拝の対象となるものですが、お墓の中心となるものは遺骨(体)であり、祖先の霊所として神聖なものが墓石なのですから、お墓を建てる場合は小さくとも質の良い石(長持ちする)を選び、全体として均整のとれた感じの良なお墓を建てるよう心がけ、あとは息長く信心の真心を回向することです。どんなに立派なお墓を建てても墓参りせず、仏事も滅多にしないというのは、墓相上は吉相でも家運は凶相ということになります。

浄土宗では寺院本堂の向きの如何を問わず本尊阿弥陀さまの方向を(西方浄土の)西と想ってお念仏をおとなえます。ですからお墓の向きが吉方でなくとも気にしすぎないことです。

墓地の種類

- ① 公営墓地
国・県・市町村営の墓地。
- ② 民営墓地
個人・会社等の墓地。
- ③ 社寺墓地
神社・寺院営の墓地。
- ④ その他
納骨堂

墓地の使用権について

一般的に、寺院墓地の使用については、寺院から墓地を買い受けたと錯覚してしまう人が少なくありません。しかし、本来はその寺院の本尊様に帰依し、その宗派を信仰している間、墓地使用を許されるもので、必ずしも永代にわたる使用できるものではありません。例えば、他宗派へ転宗するとか、或いは他寺院の本尊様に帰依する場合、墓地所有の寺院とは縁が切れてしまいますので、住職に相談

の上墓地は速やかに引き払って離壇した方がトラブルにならず済むでしょう。何れにしても、元来寺院墓地は信者(檀家)のためのものであると云うことが、公・民営の墓地との大きな相違点です。

最近の問題点

核家族化が進んだせいか、後継者がいなくなってしまう場合が出てきました。例えば、身寄りもなく独居生活をしているとか、或いは子供さんを嫁がせたために墓地の後継者がいなくなってしまうたり、又は、いても後継者の氏名が異なるために石塔を新たに建立しなおすこともあります。以上のような場合は、前もって住職に相談の上、無縁仏として扱ってもらうように御願ひするなり、氏名を刻まずに「先祖代々の墓」「南無阿弥陀仏」等と刻むことです。又、先祖代々の墓地がある郷里を離れ新しく移り住んだ場所に定住の意志を固め、墓地を新たに取得し、郷里の墓地と二箇所を所有する場合もあります。これは何れ将来、どちらか一方が無縁となる可能性が強いので、速やかに住職に相談してどちらか一方を引き払い、一箇所にするべきでしょう。

浄土